

(略)

卒業生の皆さん、皆さんもご存知の夏目漱石は、38歳から「吾輩は猫である」や「坊っちゃん」などの小説を書き始めたのですが、松山で当時の中学校に勤めていた28歳の時に、学校の雑誌（『保惠会雑誌』第47号）に「愚見数則」という短い文章を載せています。

その中で漱石は次のようなことを言っています。

「教師に叱られたとて、己の直打（ねうち）が下がれりと思ふ事なかれ、又褒められたとて、直打が上ったと、得意になる勿（な）かれ、（略）人の毀誉（きよ）にて変化するものは相場なり、直打にあらず、（略）」と。

他人に叱られたり褒められたりして変化するのは「相場」であって、その人の真価・その人らしさではない、ということです。

「相場」とは商品取引の、その時その時の値段です。その時その時のさまざまな外的事情・さまざまな人々の思惑によって左右され、上下する数値です。

漱石の生きた時代とは比較にならないほど多様で精緻な通信機器が普及し、情報網が桁違いに拡大した今、主にそれらを利用して、根拠の乏しい数値が確からしさを装って飛び交っています。自己中心的な言葉が確かな裏付けもないままに横行し罷り通っています。

医療の場では「エビデンスベースの医療」、つまり科学的・客観的な根拠に基づく医療が提唱されてきましたが、看護についても「エビデンスベース」の必要性が言われるようになりました。皆さんは、この5年間、科学的根拠に基づく数値や言葉や対処法の確かさを踏まえたケアを学ぶことができました。

その数値は誰がどんな目的でどんな調査・検査をして出してきたものなのか、その言葉にはどんな事実・どんな根拠・どんな論理の裏付けがあるのか、他の思惑のためではなくこの対象（患者）のために本当にふさわしい対処法はどれなのか、皆さんは他のどんな同世代よりも厳しい修練を積んできました。

そして、カトリック校で看護を学んだ皆さんほど、人間の命の尊厳にあらゆる面から向き合った同世代はいません。

皆さんのここまでの学びを支えてくださったご家族、先生方、病院の方々、すべての方々への感謝の気持ちを忘れずに、この道を選び、この学校で学んだ自信と誇りを持って、それぞれの持ち場での役目を果たして行ってください。

世界の変化は速度を増す一方です。しかし、誠実・高潔・奉仕の校訓を支えるカトリック精神の普遍性が揺らぐことはありません。

卒業後も、いつでも、どこでも、誠実・高潔・奉仕の校訓を思い出して「心と行いで真実をつくし、正しく品位ある言動をしているか。気高い心を保って、正義と公正を守っているか。真心をもって人に尽くし、喜んで愛の手をさしのべているか」と、自分に問い続けて行ってください。

最後に、皆さんご自身の末永い健康と幸福、さらには、世の中の人々の健康と幸福のために尽くされる皆さんの活躍を心からお祈りして、式辞といたします。